

くなってくる。全身からは、まるでサウナに入った時のように汗が噴出して止まらず、自分の意思とは関係なく、弛緩した尿道を通って膀胱内に溜まっていた黄色い小水がジョボジョボと垂れ流れ、汗と混じり合いながら、暗灰色の海に黄色い領域を作ってゆく。目の焦点が定まらず、視界が揺れている原因は、身体の震えか、それとも眼球が揺れているためか、あるいはその両方か、もはや定かではなかった。

「な、ななな何、なの……わ、私の身体に……いいいいたい、なにが……起こっているの……」

わからない。

わからないからこそ、おそろしい。

「ひ、はひ……ひいいい……」

恐怖がルールカの顔に翼を広げ、涙が光となって頬を伝ったその時である。

しゅる、しゅるる、しゅるるるるるるるるるるるるるるる……。

肉塊の化け物の身体から生えている無数の触手が伸びてきたかと思うと、露出部分が多い下着のような装束を無造作に掴むと、それを力づくで引き千切ったのだ。

ビリッ、ビリビリビリッ、ビリリリリリリリリリリリッ！

「きゃああああああああああああああああああああああああああああッ！」

衣服が強引に引き裂かれ、布地の下に隠されていた肢体が露になった。爆乳と呼ぶにふさわしい大きな乳房はもちろんのこと、綺麗な薄桃色の乳首も、肉付きのよい柔らかさそうなお尻も、薄っすらと毛で覆われたアソコも、なにもかも丸見えの状態に晒されてしまったのだ。ルールカの顔面が赤く染まると同時に、さらなる恐怖の色がその上から塗りたくられたのはいうまでもない。

「な、なんなの……なななんので……こんな、ことを……」

まだ頭が霞がかかったようにぼんやりとしているため、語彙が出て来ず、言葉の数も少なめであったが、発せられた声には怯えと恐怖の要素が多分に含まれていた。

「な、なんで……どうして……」

そう問い続けるも、おそらくは返答など期待していなかったに違いない。

しかし、反応があった。

肉塊の化け物が、ルールカの問いかけに、単語を手繰り寄せるような言葉で応えたのだ。

「オ、犯ス……」

「え——」

その声が届いた瞬間、ルールカは一瞬、空耳かと思った。あまりにも小さな声であったため、聞き間違いかと思ったのだ。いや、思いたかったのだ。

しかし、そうではなかった。

肉塊の化け物の身体のいたる所に開いている口から、おぞましい声が、連続して、まるで混成合唱曲のように流れ出てきたのである。

曰く——。

「オオオ犯ス、女……」

「女、女、犯ス、女……」

「オオオ犯ス、オオオ犯ス、オオオ犯ス……」

「犯シ抜ク……女、オオオ女……」

「グチャグチャニシテ、メチャクチャニシテヤル……」

「女……犯シテ……孕マセル……」

「ウウウ産マセル、コ、コココ、仔ヲ……」

「孕マセテ……産マセテ……マタ犯シテヤル……」
と。

欲望に満ちみちた声で、無数のギラつく視線をルールカへと向けながら、肉塊の化け物が目的を吐露したのである。

ルールカの顔面が蒼白になったのは言うまでもない。

「う、嘘……うそ、よね……ま、まさか、そんな……」

顔がひきつり、奥の歯がカチカチと音を立てて鳴る。怯えが募り、手や足が震える。しかし、その心境に対して、まるで何かを期待するかのようには鼓動がドクドクと激しく鳴りはじめ、下腹部がキュと熱を帯びはじめた。そして秘部がじつとりと湿ったかと思うと、蜜を滴らせはじめたのである。まるで肉塊の化け物に、身体をめちやくちやに蹂躪され、犯されることを望むかのように、ルールカの身体が変貌をはじめたのだ。肉塊の化け物が、ルールカの秘穴から滴り落ちた蜜を触手ですくった。そしてソレをルールカの目の前まで持ってきた。

続きは本編でお愉しみてください。